



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	朴紅著『中国国有農場の変貌－巨大ジャポニカ米産地の形成－』，筑波書房，2015年，349頁
Author(s)	伊藤，昭男
Citation	フロンティア農業経済研究，19(2)，84-87
Issue Date	2016-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66121
Type	other
File Information	19-2-11_ito.pdf



朴 紅著

『中国国有農場の変貌』

－巨大ジャポニカ米産地の形成－』

(筑波書房、2015年、349頁)

北海商科大学商学部 伊藤 昭男

I 概要

本書は中国における巨大ジャポニカ米産地の形成過程を国有農業系統、職工農家、北大荒米業という3つの主体の関係の視点から捉えることで明らかにしようとするものである。

II 構成と内容

本書は、本書の課題と構成を示した序章と4つの編に区分された全12章および終章から成る。第1編「国営農場の展開と再編」は、北方ジャポニカ米産地形成の大枠での担い手である国有農場系統の特徴を歴史的にみたものであり、「第1章 国営農場の誕生と展開」「第2章 国有農場改革と農場機能の変化」「第3章 畑作の「双層経営システム」と職工農家展開」で構成されている。第2編「三江平原の水田開発と稲作経営の展開」は、三江平原全体と事例農場を対象に水田開発とその下での稲作職工農家の実態解明を行っており、「第4章 三江平原の水田開発過程」「第5章 水田開発と米過剰局面の稲作経営」「第6章 稲作経営の展開と機械化」「第7章 稲作経営の労働過程と農家経済」で構成されている。第3編「国有農場による米の商品化」は、農懇系統による籾・米の販売戦略に関する検討がなされており、「第8章 北大荒米業による米の集荷・加工・販売体制」「第9章 基礎農場における米業の性格―八五四農場」で構成されている。第4編「一般農村における米商品化と稲作経営」は、国有農場系統による新開稲作産地形成と対比するために一般農村のブランド米産地を事例に取り上げ

ており、「第10章 一般農村におけるブランド米の産地形成と米業」「第11章 有機米の産地化と農民組織の形成」「第12章 有機米産地における生産基礎」で構成されている。最後の終章「巨大ジャボニカ米産地の構造と特質」では本書のまとめとして国有農場と一般農村における米業の性格差とその生産基盤の相違、稲作経営の技術構造の相違を比較している。

Ⅲ 論評

1) 章別の論評

第1章では日本では馴染みのない「農懇（国有農場系統）」の歴史の変遷が論じられている。地政学的要因や社会主義思想の実現から紆余曲折を辿る国営・国有農場組織の沿革には大変興味深いものがある。とりわけ、全民所有制改革によって国営農場から国有農場へと変更となった1992年以降から当地において稲作の生産性が向上したこと、また2004年からは生産隊体制が「管理区」へと再編され、職工農家の自主性および管理システムの高度化が進んだことが水稻面積の拡大および水稻収量の増大に結びついたこと、さらに農場の独立採算化という基本的な企業改革の方向性に沿って職工農家の生産請負制が採用され、独立採算制が求められている状況が示されており、当該組織のレゾン・デートルを考えさせられる点で有益である。第2章では国有農場が地域内の行政、司法、社会管理機能を併せ持つという一般国有企業とは特異な性格を有していながら中国において進められてきた「政企分離」の企業改革の観点から農業現業部門の株式会社化を進めてきたこと、またその職工農家への影響などが考察されている。その結果、上場子会社と上場していない農場の間で経済的格差が広がっているという問題が指摘されている。その対応としてそれら組織の生産的結合が考えられること、また、「利費」の値上がりという課題への対応として「農業協会」と

いった商品生産の拡大方策が考えられることといった指摘は今後の組織改革の方向性を見出す意見として興味深い。第3章は国有農場全体の土地利用において無視しえない比重を占める畑作に関してこれまでほとんど行われてこなかったその経営の実態と職工農家の形成過程を明らかにしようとしたもので、中規模国有農場である新華農場を事例に職工農家による個別経営と従来の生産隊による組織経営との混合である「双層経営システム」が続いている実態と、輪作体系の保持と借地料支払との圧力の中でいかに収益をあげていくかが今後の畑作経営の課題であることが明らかにされている。第4章は黒竜江「懇区」のジャボニカ米産地である三江平原の水田開発過程を水田開発資金の分担関係と関連づけながら明らかにしており、詳細な財源分析は当該地域の急速な稲作展開を理解する上で有益な情報を提供している。第5章は、先の新華農場を対象に稲作経営における生産隊、農場本部の機能を個別稲作経営の実態と結びつけて分析している。これにより経営規模層を代表する3戸の農家の記帳調査からではあるが本格的な水田開発が行われた1994年から日本国内の米価下落に影響された2003年までの国有農場での稲作経営の変動が明らかにされており、国有農場システムの長所と短所が浮き彫りにされている。第6章は、第5章において対象とした後発的水田開発と異なり、旧開的な生産隊の9戸の職工農家の水田開発過程を考察したものである。後発的な水田化の条件を生かして規模拡大と機械化が並進的に行われ、請負労働依存の大規模経営ではなく、機械化一貫体系の確立化がみられたことが示されている。第7章は、第6章と同じ生産隊の職工農家の記帳調査から家族経営の性格を労働過程と農家経済・生活過程の観点から考察したものである。これより雇用労賃・賃料のコスト上昇、生産資材以外の農薬・肥料・ディーゼルオイル・粃販売など農場によって保護されない市場利用の

範囲が拡大しているものの一定規模の優位性を活かした相対的に安定的な稲作経営を保っていることが見出されている。第8章は、農懇総局によって設立された中国における米のトップ企業に位置づけられる「北大荒米業（株）」グループが赤字経営という厳しい経営基盤にさらされている実態が明らかにされている。その理由として北大荒農業の子会社を生産基地とする体制がとられていないこと、またそもそも国有農場の経営維持のために設定される「高い地代」により、生産米の価格競争力がないことが示されている。この点は北大荒農業（株）グループが多角的な経営を行っているにも関わらず生じていることを考えると単に経営戦略の失敗に帰してよいのか、それとも国有農場の組織・制度的要因と考えるのか、さらに他に原因が求められるのかが問われねばならない問題かと思われる。第9章は、北大荒米業の問題をその子会社精米所の機能や関連する精米企業の機能の分析から明らかにしようとするものである。それより北大荒米業の基礎農場においても精米販売は中心的な機能を果たしておらず、生産・加工・販売体制上において不十分な連携状態にあることが示されている。このことは系統機能が十分働いていないと考えるのか、それとも中国における米ビジネスの競争性によるものなのか、ガバナンスの問題を含め、一層の考察が必要であるように思われる。第10章は、国有農場系統による新開稲作産地形成を一般農村との対比で考察しており、これより1990年代末の米価下落のもとで精米加工企業が国営、民営を問わず多様な企業形態による販路開拓によって競争を促進せざるを得なくなった状況が浮き彫りにされている。第11章は、第10章に関連して米業と農民組織との関係が考察されており、1990年代後半以降、政府が私営企業の設立を奨励して米業が乱立し企業間競争の激化により農家の困い込みが必要となったこと、米が過剰基調に変化し単純な増収志向から緑

色米や有機米など品質志向となったこと、農民合作社型・技術協力型・特約組合理型といった米業・農民組織の変化といった最近の注目すべき変化が把握されている。第12章は、第11章と同様、一般農村を対象に有機米の生産基盤として借地の性格と稲作作業体系の特徴が考察されている。これより有機米の収益性の高さから借地競争が激化し、借地料水準が上昇することによって稲作経営を圧迫しているという国有農場にも共通する課題が指摘されているとともに、作業方式において機械化の進展が遅れていることも明らかにされている。

2) 全体を通じての論評

本書の研究動機は、序章において述べられているように現在の中国における農業および農村工業の展開では極めて特異な存在であり、かつ巨大なジャポニカ米産を形成しているにも関わらず十分な研究がなされてこなかった黒竜江省の国営・国有農場の産地形成に着目したことにある。いくつかの代表事例を対象とした分析・考察であり、対象を全体的にカバーしていないという限界はあるが、中国の現地調査の困難性を考えると詳細な調査の実施によって包括的な調査に匹敵する論理展開を行っている点を高く評価したい。著者の現地調査遂行能力の高さを物語るものである。

なお、本書の目的を超える課題と言えようが今後の研究への期待をいくつか提示しておきたい。第一は、「北大荒米業」を含めた国有農場（農懇）における生産から精米・販売までの産業チェーン化（含む、安全米対策、流通改善）をどのように捉え考察するかという点であり、米産業の競争激化の中で国有農場は総合的な米産業としていかなるガバナンス（経営）を図っていくべきかという戦略論の考察が必要である、それは国有農場（農懇）の米産業クラスター化を考察することでもある。そうした産業論と流通論の視点からの考察を期待したい。第二は、国有農場（農懇）

という組織そのもののレゾン・デートルに関する考察の必要性である。目下、大転換期に差し掛かっていると考えられる中国農業ではアメリカ農業をも思わせる大規模農業化が進行している。またそれは農地の流動化・資産化および農業労働力の減少も伴っている。こうした状況に直面して、従来の社会主義期における人民公社の流れを組む国有農場（農懇）が果たして今後、競争に伍していくことが可能なのかどうかという組織論・制度論および経営論的視点からの考察がなされれば、中国の社会主義的農業の歴史的再評価の意味からも、非常に意義深い研究といえよう。また、国有農場（農懇）を発展的な農民專業合作社との関係性の視点から考察することも、中国の今後の大規模稲作農業経営主体を模索する上で有益な研究テーマかと思われる。こうした期待は残るものの、本書は、中国におけるジャボニカ米産地の形成過程論として現在状況も含めバランスよくまとめられている。中国の稲作産地形成の理解ばかりでなく、日本のコメ生産を取り巻く環境の理解と今後の生産展望を考察するために欠かせない一冊である。研究者、実務者の一読をお勧めする。